
俺と姉さんの1日

羽鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と姉さんの1日

【Nコード】

N2613K

【作者名】

羽鳥

【あらすじ】

美人でブラコンの姉とその弟がただいちゃいちゃするだけのヤマモオチも無いほのぼの日常系嫉妬ストーリー。連載版もそのうち書きます。

（前書き）

全ての姉スキーにこの作品を捧ぐ。

俺の朝はそんなに早くない。

現在高校3年生で、両親とは離れて暮らしている。必然と家事は親以外の者がすることになるが、それでも極端に朝早く起きるということはない。

7時ちよつと前に起きたら早い方だ。

親がいないのに何故そんなに朝ゆつくり出来るのか。
そんなの簡単だ。

親以外の人と一緒に暮らしてるからだよ。

「おはよつ、今日もいい天気だね！」

ベッドに寝転がりながらも窓から確認できる今日の天気は晴天。
頭のすぐ後ろ、吐息を感じそうなくらいの距離から聞こえてきた
声は今日の天気と同じくらい晴れ晴れとしていた。

「俺は昨夜1人でベッドに入った。ドアには鍵をかけた。なのに何
でアナタがこのベッドに入っているんですか？」

「簡単なことだよ、ワトソンくん。鍵をかける時点でお姉ちゃんはこの部屋に入っていたのです。そう、見つからないように隠れてね」

「アンタはどこぞの都市伝説か」

昨夜、やけにクローゼットがガタガタ揺れると思ってたらそういうことだったのか。

てつきり幽霊的なものを連想して1人びくついていたのに。

「お姉ちゃん昨日は興奮しちゃったよー。眠っている弟くんを目の前にして、でも手を出したら絶対怒るだろうなーって思ってた一生懸命我慢してたんだけどやっぱりちゅーくらいはいいかなーって・・・」

「・・・・・・・・したの？」

「なにを？」

「ちゅー」

「・・・・・・・・あれは接触事故の部類に入るんじゃないかな？」

お父さん、お母さん、俺のファーストキスは寝ている間に実姉に奪われてしまいました。

泣いていい？ 本気で泣いていい？

っていうか既にちよつと涙浮かんできた。

「だいじょーぶだいじょーぶ、ほっぺだったから」

「・・・・・・・・ホント？」

「うん、ほっぺとおでこと首筋と腕と胸板とうなじ」

「いやあああああー！」

なんか普通にキスされるより辛い！

うわっ、しかも腕とかちよこつと赤く痕になってるし。

「あの味は絶対に忘れないよ」

「忘れてください全力で」

そこまで会話を交わしてようやくベッドから体を起こす。
実はこういうのは今月に入ってすでに3回目だったりする。
だからって慣れることが出来るわけでもないんだけど。

「姉さん、着替えたいんだけど」

「うん、どうぞ。録画の準備は出来てるよ?」

「出てけ」

一体なにを記録するつもりだ。
姉さんはビデオカメラ（定価16万）を片手にとぼとぼと部屋を
出て行った。

「まったく、朝から騒がしいんだから……」

愚痴をこぼしつつ寝巻きから制服へと着替える。

正直言つて俺は姉さんが嫌いではない。2人で暮らしているし、
むしろ家族としては好きだ。

ずっと通った鼻筋、切れ長の目、小さいながらもふっくらとした
唇は冬でもうつすら桜色に染まっている。1日の大半を室内で過
すので、肌は新雪のように白く透明感があり、肌荒れなんて無縁と
いうように艶やかだ。

身長は俺よりも少し低いくらいで、贅肉なんかまったく付いてな
いと言つてもいいくらいにスタイルがよく、肩より少し下のセミロ
ングの黒髪はその容姿と相まって非常に似合っている。

いまさら否定はしない。

姉さんはとてつもなく美人だ。

一体どうやったらそんなに完璧な容姿に生まれることが出来るのか問い詰めたいくらいに美人だ。

どこで何を食ったのか過去2年間に渡って調べ上げた調査結果をアイドル事務所に売れば小金を稼げそうなくらいに美人だ。

でも、どんなに容姿が優れていようと家族であるという事実だけは消せない。

血の繋がった姉、俺にとってはそういう存在だ。それ以上でもそれ以下でもない。

「やつ、着替え終わったー？」

着替え終わったところ、部屋のドアが突然開いた。

「姉さん、そういうことはドアを開ける前に聞こうよ。開けながら聞いても質問の意味が無いでしょ」

「だってどっちにしろ開けるつもりだったしさ」

「……………着替えたのか聞いた意味ねえじゃん。

「それより朝ごはんできてるよ！いっしょに食べよう！」

「はいはい、いま行くって」

姉さんが楽しげに俺の手を引いて居間へと向かう。

まるで雲を掴んでいるように柔らかく、陶器を思わせる滑らかさ

を持つ姉さんの手の感触。

しかし室内で手を繋ぐ必要はあるんでしょうか。たぶん無いよね。

「姉さんの手の握り方なんかいやらしいんだけど」

「えっ、またお姉ちゃんに欲情したの？」

「姉さんがやたらと俺の手を撫で回してくるんでしょうが。あと俺が以前にも欲情したことがあるみたいと言っただけ」

「隠さなくてもいいんだよ。昨日だってお姉ちゃんがお風呂入ってるときに脱衣所をうろついてたでしょ」

「単に歯を磨くために洗面所を使ってただけじゃん」

「しかもお風呂の窓から覗こうとしてたでしょ。なんか黒い人影が見えたもん」

「……姉さん、ここマンションの2階だよ？」

風呂場に面した窓の外に人間が歩けるようなスペースは無いはずだ。

「でも本当にいたもん！ 人みたいな形をした影が窓を引つかくようにがりがりーって。『タスケテ……』とかいう声も聞こえたよ」

「姉さん何を見たの！？ それたぶん生き物じゃないよ！ 肉体という鎖から解放された高位存在だよ！」

「弟くんはときどき妙に難しいことを言うね」

俺だって何を言ってるのかよく分からない。

今度、靈感があるとかいう友達を呼んで見てもらうか。胡散臭いけど。

ん？ ちよつと待てよ……

「姉さん、昨日の夜にクローゼットがガタガタ揺れてたのって姉さんが入ってたからだよね？」

「いんやー、お姉ちゃんはベッドの下に隠れてたよ？ だって弟クンのクローゼットは洋服がいっぱい入ってて人が入る隙間なんて無いじゃん」

「えっ」

「ちな弟くんは実の姉を性的対象として見ている」

もはやツツコむ余裕も無い。

いやいや、そんなことあるわけないって。だってもう21世紀だよ？

幽霊とかさ、いるわけないじゃん。

アレだよ、アレ。Windows 7。XPとの互換性もあるみたいだしなー。クローゼットと同調してもおかしくないもんなー。やっぱりうちはまだXPで十分だったな。パソコンショップ行つたときにノリでお試し版の最新機種なんか借りなきゃよかった。よし、今日の学校帰りに返しに行こう。

「弟くん、手にすっごい汗かいてるけど」

「姉さんの手が暖かくてさ。カプサイシン並の発刊作用だよ」

「ほら、これで汗拭きな？」

「そうやってさり気なく手を自分の胸元に持っていていけない！」

このように姉さんは色欲にまみれているが、実は料理や家事が得意だったりする。

その上、大学での成績もよく、人望もある。

才色兼備、容姿端麗、明眸皓齒、頭脳明晰何でも出来るスーパー姉なのだ。ハッハッハ。とりあえず四字熟語を並べてみたけどなんか悔しい。半分は俺と同じ遺伝子のはずなのに。

居間のテーブルには既に朝食が用意されていた。

ご飯、味噌汁、ハムエッグ、サラダ、あとは昨日の夕食のあまりとデザートフルーツヨーグルト。飲み物に烏龍茶とオレンジジュースの2種類準備しているあたり、気が利いている。

自分の箸が置いてある食事の方の座布団に座り「いただきます」と2人で声を揃える。

まずは味噌汁へと箸を伸ばした。

うん、美味しい。出汁も市販のものじゃなくて鰹節から自分で作っているようだ。

「……………どうかな？」

「うん、美味しいよ」

「ありがとっ」

頬を軽く朱色に染めながえへと笑う姉さん。

凜とした風貌なのに、中身はどこか子供っぽいところがいかにも姉さんらしい。

「こっちのサラダには昨日近所の人から貰った京菜が入っててね、
ドレッシングもそのとき教えてもらった手作りのを使ってて・・・」

そうして始まる姉さんの料理解説。いつものことだ。

姉さんは本当に楽しそうな笑顔で一つ一つの料理のこだわりを説明していく。

そして最後にこう言って終える。

「全部弟クンのために作ったんだよっ！」

「・・・・・・・・はい、いつもありがとうございます」

「お礼はちゅーでいいよ」

「しません」

学校は俺の数少ない心落ち着く場所だ。

家では姉さんが俺の理性を乱そうと画策してくるが、さすがに学校内だけはその魔の手から離れられる。

授業は退屈だけど、友人達と昼ごはんを食べたり他愛もないことを話したりするのはなかなか楽しい。

今日も授業を受け、姉さん手作り弁当を食べ、また授業を受け、放課後部活前の友人と少しだけ話をして帰路に着いた。

必要な教科書を鞆にしまつて、教室を出る。

下駄箱の靴と履き替えて外に出ると、違和感に気付いた。

何だか入り口の方が騒がしい。

学校の入り口は2つあるが、家の方向からして騒がしい方を通らなければかなりの遠回りになる。

仕方無いのでその騒ぎの元凶を確かめに行くと、

見慣れた顔があつた。

「あ、ヤッホー！ 弟クン！」

「なにしてんの、姉さん」

大学帰りなのだろう。格好は朝に家を出たときと同じで、丈の長いスカートと長袖のTシャツの上にカーディガンを羽織っている。

こういう清楚な格好は姉さんが着るととても良く似合う。まあ大抵の服装は似合ってしまうのだけど。

巷で噂の森ガールとかいう格好らしい。

森ガールというのは森の中にいそうな女の子というのがコンセプト

トらしいが、本当に森に行くのなら長袖長ズボンで軍手を付けるべきだ。貴様らは自然を舐めているぞ。

「今日は講義が早めに終わったから来ちゃった」

そう言って、てへつと笑ってみせる。

なるほど、この人だかりは姉さんを見に来た生徒だったのか。

「ちょうど冷蔵庫の中身も切れそうだしさ、いっしょに買い物行こっ？」

姉さんはごく自然な動作で当然のように俺と腕を組んだ。

これはどう見ても姉弟の仕草ではない。

恋人とか、恋人とか、あとは……そう、恋人とかのすることだ。

「ね、姉さん、離してよ。恥ずかしいってば」

「照れることは無いのですよ弟くん。お姉ちゃんに身をゆだねなさい」

さらに腕を絡めてくる。体勢としては俺の腕を姉さんが抱いているようになってしまった。

これは恥ずかしい、なんの罰ゲームだ。

周囲の男共の嫉妬の視線に「これは姉です」と返してやりたいのだけど、それはそれで別の波乱を生みそうで怖い。

ときどき腕に当たる柔らかい感触にどぎまぎしながら、結局そのままの格好で近所のスーパーへと向かった。

なんだよこれ。俺が何か悪いことしたんですか。答える神様。

「ところで夕食のリクエストはありますか？」

「うーん………特に無いけど」

「なら今日は肉じゃがにでもしよつか。弟クンの好物だもんネ！」

「まあそれはそうなんだけど………」

どうにも釈然としないことがある。

「たまには姉さんの好きなものでもいいんだよ？　いつも俺に合わせるじゃん」

姉さんはいつも食事のメニューを俺に確認してくる。
作っているのは姉さんなんだから自分の好きなものを作ったっていいんじゃないだろうか。

「お姉ちゃんは好き嫌いが無いのです」

「でも比較的好きな料理くらいはあるんじゃないの？」

「うむむ………」

買い物カゴは俺が持っているので、姉さんはバッグを肩にかけて腕を組んで考え始めた。

確かに今までに姉さんの嫌いな食べ物なんて聞いたこともないし、どんなものでもニコニコして食べてたような気がする。そしてニコニコだけで某動画投稿サイトが思い浮かんだ俺は末期。
やがて姉さんは顔を上げて答えた。

「好きな料理は無いけど、弟クンの作ったものなら何でも大好物だよっ！」

「そうっすか……」

姉さんは笑顔でそう言い切った。

家族目に見ても魅力的過ぎる笑顔だった。

「なら今日は俺が作ってもいい？ たまには姉孝行するよ」

親孝行をアレンジしてみたらよく分からない感じになってしまった。

それでも意図はちゃんと伝わったようで、姉さんは「うん！」と元氣良く頷いた。

そして夕食。

自分ではそれなりのものが出来たつもりだ。

豆腐を使った和風ハンバーグとオニオングラタンスープ、スモークサーモンのサラダにデザートはクレームシヨコラ。

気合を入れて作ったら少し普段より豪華になってしまった。

久しぶりに包丁を握ったので少し手間取ったけどレシピは知っていたので割とスムーズに作れた。

心配だったのか、料理の最中姉さんが「手伝おうか?」と言ってきたが、ここまでして手伝って貰ったら本末転倒なので、全部一人で作った。

「ど、どうかな? あんまり自信は無いけど……」

「ん! このハンバーグすごく美味しい! スープも上手に出来てるよ」

「そう?」

一口食べてみる。

「……ハンバーグには少し火を通しすぎた。スープは味付けが薄い。」

食べれる程度ではあるけど、別にそんなに美味しいとは思えない。普通だ。普通の味だ。

「うん、お姉ちゃんが今まで食べてきたものの中では一番美味しいよ」

「それは嬉しいけど……」

正直ちよつと複雑な気分だ。

「弟クン、愛情は最高のスパイスってよく言うでしょ」

「ごめん、愛情は入れてないんだけど」

「だいじょうぶ、さっき自分で入れといたから」

セルフサービスの愛情ですか。
どんな荒技だよ。

「でも美味しいのは本当だよ？　言っただしょ、弟クンの作ったものは何でも好物だって」

そう言って微笑む姉さんはとても嘘をついているようには思えない。

なぜあるとき夕食を作るなんて言い出したのか自分でも分からな
いが、嬉しそうに食事を頬張る姉さんを見ているとどうでもよくな
ってしまった。

夜、食器も洗い終えて、あとは寝るだけになった。

廊下を進み、自分の部屋の扉を開けて、そこで立ち止まる。

自然とクローゼットに目が行った。

昨日の夜、誰も入っていないはずなのにガタガタと揺れていたク
ローゼット。

そして姉さんが風呂場で見た人影と『タスケテ』という声。

「いやいや、まさかね。うん。あれはWindows 7せいだからね。最新OSなら超自然現象を起こしてもおかしくないからね」

「何を言ってるのかな弟くん」

「うぉあ！ 姉さん？」

気がつくともパジャマ姿の姉さんがすぐ後ろに立っていた。
風呂上りのようで、軽く湯気を立てている。ほのかに感じるシャ
ンプーの匂いが妙に色っぽい。

「弟くんが独り言なんて珍しいね」

「いや、ちょっとパソコン関係で悩みがあつてさ」

「大方、お姉ちゃんがお風呂で見た人影と昨日の夜クローゼットが
1人で震えていたことが怖くなって最近借りてきたパソコンのせ
いだと責任転嫁して自分を納得させようとしてたつてとこかな？」

なんつー洞察力だよ。

「安心なさい。こいうときはお姉ちゃんが何とかしてあげるから」

その晩、俺は姉さんと一緒に寝ることになった。
高3にもなつてどんな仕打ちだこれは。答える神様。あれ、なん
かデジャヴ

「ね、姉さん。もう寝ちゃった？」

返事はない。ただの姉さんのようだ。当たり前だ。
姉さんはすでに眠ってしまった。

「うむう……」

姉さんは向かい合って俺の頭を抱きかかえるようにして眠っている。

すぐ目の前の触れそうな距離、つてかすでにばりっぱり接触している零距离に姉さんの胸があり、そのマシュマロのような感触もさることながら、第二ボタンまで外しているせいで魅惑の胸元生ライブON AIR中。

少し顔を上げればこれまた触れそうな距離に姉さんの第二魅惑ポイントk u t i b i r u（唇）が呼吸に合わせてゆっくりと震えている。

さっきはシャンブーの匂いがしていたが、今は花のような甘い匂いが漂っている。いつも抱きつかれているから分かるが、これは姉さん自身の匂いだ。ハイスベック姉さんだからこそ出来る高機能デフォルト装備。なんだかクラクラしてきた。

この姉さんホールドから抜け出すには体勢からして少々力ずくになつてしまうのだが、天使のような寝顔を見ていてそんな気が起こるわけもなく、

「ま、たまにはいいか。こういうのも」

そのまま寝た。

いつも以上にゆっくりと寝ることできた夜だった。

こんな感じの俺の日常。
姉さんと一緒に暮らすのは大変だけど、それなりに充実している。

翌朝。

「姉さん！ クローゼットが！ クローゼットの扉が開いてるよ！
寝るときは閉まっていたのに！」

「あー、これがMicrosoftの底力かねえ」

「いやあああああ！！！」

（後書き）

どうも、作者の羽鳥です。

先日お風呂に入っていたら『羽鳥よ、姉ラブコメを書くのじゃ』という謎の天啓を受け、それから執筆中ほとんど手を止めることなく自分でも意外なほどのペースで書き上げました。驚きの姉パワー。

あらすじにもある通り、内容は弟とブラコン姉がただいちゃいちゃするだけの話となっています。

もし続編や連載版、もしくは妹編も書いて欲しいという人がいたら、ぜひ感想やメッセージをください。光の速さで作業に取り掛かります。

では、現在連載中の『伊波久遠の魔法』の方もよろしくお願いしますー。

さらばじゃ。

10 / 3 / 13 連載決定。近日公開予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2613k/>

俺と姉さんの1日

2010年12月21日11時01分発行